

在学中の皆さんに伝えたいこと

情報科学科卒業生 淡路 義和

はじめに

まずはじめに、我が出身学部が30周年とのことなので、声を大にしてお祝いの言葉を述べさせて頂きたいと思います。おめでとう、教養学部!! これからも世に面白い人材をたくさん輩出する学部として、長く存続することを大いに望みます。

改めて自分が入学し、卒業した時のことを思い返すと、もう20年も時が経っていることに気がきます…それは私も歳を取るはずですね。これからここに書く話の内容が、教養学部30周年記念誌へ載せる記事としてふさわしいのか、適している寄稿となるのか、いささか不安ではありますが、私が卒業して20年の月日が経ち、いま在校中の皆さんに私が伝えたいことを、過去の自分も振り返りながら書いていきたいと思っています。

自己紹介

まずは、私の自己紹介を簡単にします。私は1976年（昭和51年）8月に秋田県秋田市で生まれ、中学卒業まで秋田で育ち、親の都合で高校入学時に仙台へ移住、以降は仙台に居を構え、現在に至ります。真面目な性格であるとはお世辞にも言えませんでした。要領がそれなりに良かったためか、浪人や留年の経験をする事なく、結果、東北学院大学に在籍したのは1995年4月～1999年3月までの4年間でした。

当時の教養学部は一学科三専攻制で、私が入学した現在で言うところの「情報科学科」は、当時は「情報科学専攻」という名前でした。1995年と言えば、今となってはグローバル企業に成長し知らぬ者はいない、ビルゲイツ率いるマイクロソフトが、コンシューマー向けPCのOSとして「Windows95」を発表、それまでは一部の先進的な人たちが扱うモノだったパソコンとインターネットを爆発的に普及させるきっかけとなった年です。教養学部は、その6年前（1989年、平成元年）に設立されたと認識していますが、情報科学に着眼した学部の設立は、東北の大学の中では早い部類であったのではないだろうかと推察します。

このようなタイミングで情報系の知識を得る機会に恵まれた私は非常にラッキーでした。何故なら卒業年である1999年の翌年には2000年問題も控え、1990年台初頭にバブルが弾

け「就職氷河期」などと言われていた時代に、なんと「IT バブル」が起きて、真面目とはお世辞にも言えなかった私も「大手」と言われる企業へ就職する切符を手にすることが出来たからです。

自分の素養と特性、強みと弱みを知ることが出来た「大手企業」在籍時代

最初に新卒で就職した「大手企業」には6年間在籍しました。この6年間で、私は以降のキャリアに影響を及ぼす多くの気づきを得ることが出来ました。例えば組織のあり方。大手企業の主たる役割は、人々が生活するために必要なインフラの品質を維持することであり、そのためにボスマネジメントシステムは非常に効果的であることや、そのような組織の中で求められる役割は、いろいろなミッションを一定の品質でそつなくこなすことである、ということ。要するに、大手企業で必要な人材の大多数は、平均的に何でもこなせる人材が求められるということでした。

一方で、その真逆に位置するのがスタートアップ系のベンチャー企業かと思います。インフラの品質を維持することが役割である大手企業に対し、ベンチャーはインフラになり得る新しい価値を創造し、0から1を生み出すのが役割です。0から1を生み出すためには、今の社会を理解した上で、普通や当たり前と言われていることに疑問を持ちつつ、将来どんな世の中になったら幸せなのかを想像し、創り出す必要があります。これを成すには、専門性が高く、飛び抜けた強みを持つ個人が、最大限にその能力を発揮出来る環境、組織が必要だと思っています。

私は、楽しく仕事と付き合っていくために必要な、沢山のことを大手企業で学びました。例えば、大手での様々な成功・失敗体験を通して「自分の素養・特性や、強み・弱み」を理解することが出来たおかげで、結果、自分が大手企業の役割である「インフラを守る」仕事に向いていないことが良く分かりました。それは「資本力があり、育つ猶予時間を貰える大手企業」だったからこそ存分にやらせてもらえた、という側面も大いにあると思います。これは中小企業の経営者になったからこそより感じていることです。「自分を知ること」は、社会に出る前でもある程度分かり得たことだと今では思いますが、現在のよう大手企業向きの教育制度の中ではなかなか気づきにくく、自らが自分を知ろうという明確な意思をもって動かなければ、自分がどういった素養・特性、強み・弱みを持っているのか、理解することはなかなか難しかったであろうとも思います。

ありがとうと言ってもらえる喜びを知った「クレープ屋」時代

大手企業の退職を決めた私がやりたかったことは「自らがストレスを感じない組織を創造する」ことでした。具体的には、「誰かの得意で誰かの不得意を補うことができる」組織です。全ての能力が満遍なく高い人間などほとんどいません。大半は、皆不得意なジャンル、弱みを抱えています。一方で、得意なこと、強みも必ず持っている。これが個性というものだと思います。不得意なことをやれと言われるほどストレスが掛かることはありません。個々が持つ強みを、誰かの弱みを補完するために活かすことが出来る組織。これならストレスを感じず仕事出来るのでは、と思いました。

そのような理念の企業がないか、探しましたが、じっくりくる企業を当時見つけることはできませんでした。そこで、自分と同じような考えを持った個人が集まる組織を創ろうと考えました。しかし、当時の私は一介のシステムエンジニアに過ぎず、それまで経営と名がつく業務に触れたことは一度もありませんでした。経営するために必要な最低限の知識を得るためにどうすれば良いか。学校に通うか、もしくは経営支援系の仕事に就くか。色々考えていたところ、新規事業を一から立ち上げる経験を積む機会に恵まれます。この事業が「移動販売形式でのクレープ販売事業」でした。ここでは事業計画の立案から財務、労務に至るまで、事業を一から立ち上げ運営する経験を積むことが出来、経営に近いナレッジを得ることが出来ました。結果、今の会社を起こすベースとなる知識・経験を得ることが出来たのですが、何よりこの経験で得ることが出来た一番の気付きは「ありがとうと言ってもらえる喜び」でした。

クレープ屋は、皆さんもご存知の通りお客様の目の前でクレープを作り、販売します。美味しければ目の前で「美味しい、ありがとう！」と言ってもらえる。これがものすごく嬉し



クレープ屋時代に製作した移動販売車

かったのです。仕事は、誰かが幸せになる価値を提供して、その対価を貰うこと。「ありがとう」と言って貰うことが、自分のモチベーションになるから良い仕事をする。仕事を楽しむということは、実は難しいことではなく、非常にシンプルなんだということに気付きました。

そしていよいよ起業！ 株式会社コー・ワークスを設立

その後、IT系の中小企業で経営企画の執行役をやらせて頂いた後、2009年4月、満を持して株式会社コー・ワークスを設立します。これも様々な運や縁に恵まれて起業に至りました。経営理念は、「個性を活かし自立しながら働ける場を提供する」とし、「自立とは自分の強みを活かし、弱みを補ってもらいながら価値を提供すること」と謳いました。結果、この理念に賛同してくれた様々な強みを持った人たちが集まってきました。例えば、ハードウェアを作ることが出来る人、広告代理店の営業をやっていた人、東北に強い思いを持った人など。これらの強みを掛け合わせ、新たな場を作ることで、弊社が請け負う役割の幅はどんどんと広がっていきました。コー・ワークスは今年で10周年を迎えますが、現在はITのナレッジを軸とした「モノづくり事業」と「コトづくり事業」を展開しています。目指すは社会にとって必要な価値をカタチにし、インフラとなり得るモノ・コトを提供する企業の立ち位置を、ここ東北発で確立することです。具体的にどんなことをしているのか、もし興味ある方がいらっしゃいましたら、弊社のホームページをぜひご覧になってみて下さい。

さいごに

これから皆さんは、数年後に就職することになるかと思います。就職とは、自分と社会



CO-WORKS

最近変わったばかりの新ロゴ！

のマッチングです。最適なマッチングをするためには、自分と社会のことをよく知る必要があります。これは、経営者になり、採用をする側の立場になってよりリアルに感じていることです。最低でも自分のことは理解して、自分の強み・弱みは声を大にして言える状態で来て欲しい、というのが本音です。そうじゃないと、自社のどういった場でその人の素養・特性を活かせるかを考えるのに、時間・コストが掛かってしまいます。どうやったら自分や社会のことをリアルに知ることが出来るか。これを真剣に考え、今すぐにも行動に移してみてください。きっと1つも無駄になることはないはずです。

皆さんの未来がより楽しく、充足感に満たされたものになることを願っていますし、我々は次の未来を背負って立つ皆さんに誇れる社会を作りあげ、バトンを渡せるよう努力していきます！

ついでに

ここまで私のキャリア（経歴）と、その中で大事だと思った気付きについて、少しでも皆さんのお役に立てばと思いご紹介してきましたが、私がいつからか常に意識するよう心掛けていることの中で、特に大事だと思うことを2つほど皆さんにご紹介したいと思います。これはあくまで私の考え方なので、自分の考えと比較し、ブラッシュアップするための参考にしてもらえればと思います。

—「普通・当たり前」と言われていることに疑問を持つ

そんなの普通でしょ、当たり前じゃん。いろんなところで良く使われる言葉ですね。でも待って下さい、それって本当に普通なのでしょうか？ 普通・当たり前という概念は、人の考える力、思考を止めてしまうことがあります。社会というのは、時の移ろいと共に常に変化していくものです。普通、当たり前という概念は、とある時代における、ある時点での考えを固定概念化したものでしかありません。それが普通と言われていた時代背景や理由、そしてその本質は何なのかをしっかりと理解した上で、その普通といわれている概念は形骸化していないか、今の時代にマッチしているのか、変える必要はないかを常に意識し、考えることが非常に重要です。

—相手の立場を理解する意識を常に持つ

人は、1人では生きていけません。何をするにしても、大概のことは相手が存在します。その相手の立場をしっかりと理解することは、相手とより良い関係性を構築する上で非常に重要なことです。相手はなぜそのようなことを考えるのか。一見、自分にとってマイナスな行動をしている相手がいたとしても、相手の立場を理解すればその行動の本質的な意味に気付くことが出来、その上で話せば、結果 Win-Win の関係性を築くことが出来るかもしれません。戦うのは最後の手段。少子高齢化が進み、人が少なくなって来た時代だからこそ、競争ではなく協業を常に意識し、実現する方法を考えることがこれからは重要であり、相手の立場を理解するのは、協業を実現するための最低条件です。



経歴

卒業 1999年3月卒

学科 教養学部 情報科学専攻

ゼミ 渡部ゼミ

現職 株式会社コー・ワークス 代表取締役 CEO